
短編小説

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説

【Zコード】

Z7962Y

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

三十代で作家の僕は契約先の出版社から三十枚の短編を書くよう言われていた。短編の書き方の難しさを感じながらキーを叩く。締め切りが二日後に迫っていて、ずっとパソコンのディスプレイに入っていた。二十七歳で中央の大手出版社が主催する新人賞を受賞し、晴れて文学界に入ってきてからずっと書き続けている。師匠に当たる先輩作家からは筆を絶やすなと言われていて、絶えず書いていたのだが……。

*

パソコンのディスプレイに見入りながら、僕はずつと考え続けていた。目の前には書きかけの原稿があるのだ。契約先の出版社は短編を書いてくれと言う。しかも枚数的には三十枚ほどのショートストーリーを、だ。確かに悩む。三十枚で話をまとめるとなると、上手くやらなければ失敗するからだ。ずっと悩みながら、やがてまたキーを叩き始めた。締め切りは一日後である。プロの作家である僕にとって短編の一つを書くのがさえ辛いのが現状だった。特にスランプというわけじゃなかつたのだが……。昔からずつと小説を書き続けてきた。中央の大手出版社主催の新人賞を獲り、それからずつと書いている。文芸雑誌などに連載を持っていたし、読みきりの短編や中篇も継続的に書き続けながら、原稿料や印税などで暮らしている。決して自分の書く小説が全ての人を受けているわけじゃない。ただ書き続けることが何よりの修行だと思つていた。それをしなければ、作家は筆を折つたのと同じになる。先輩作家で僕の師匠筋に当たる人も最近はほとんど書かなくなつていた。だけどその作家はもうある程度、名を成していく、別に今更書かずとも過去作の印税などで暮らしていくようだ。たまにおうちにお邪魔することもあつたのだが、お会いするたびに、

「君はまだ若いし、有望だ。絶対に筆を絶やすなよ」

と言っていた。その言葉通り、二十七歳で晴れて作家デビューしてから七年間、ずっと書き続けている。三十四歳という微妙な年齢だ。仕事はたくさん入つてくるが、倦怠けんたいを覚えることもある。心も体も疲れるのだし、独身である以上いろんなことをしないといけない。家事や掃除、洗濯などは慣れていても何かとサボりがちになっていた。だけどそれはそれで慣れてきつつある。歩を緩めることも必要だろう。ずっと人生行路を歩いていきながらそう思つてい

た。長いのである。三十代の僕にとつて可能性はいくらでもあった。ただモノを書くのが仕事である以上、疲労を覚えることはある。ずっとパソコンに向かっていれば何かときついのだ。それは十分分かつっていた。だから頭を休めるため、合間に献本してきた他作家の本などを読むこともある。上手いか下手かは別として、今流行の最先端にいる作家たちが一体どんなものを書いているのか……？興味深いのだった。どんなものが今の市場で売れているかをチェックするという意味では。

*

「大賀さん、早く原稿くださいよ」

翌日、電話で担当編集者が督促してき^{とくそく}た。複数の出版社と契約しているのだが、そのうちの一つの社の関係者である。前日いつも通り睡眠導入剤を飲んで眠ったのだが、早めに眠りから覚めてしまつたのでコーヒーとトーストで軽めの朝食を取つた。そして午前八時前にはパソコンを起動し、ドキュメントを開く。OSが古く旧型のパソコンなのだが、使い慣れていたので大事にしていた。これで全ての原稿を書くのである。もちろん完成原稿は一々紙にプリントアウトせずに、メールに添付して送つていた。今は原稿をネットでやり取りする時代である。ペーパレス社会というがまさにその通りだつた。それに最近はケータイだけでなく、ケータイ型の電子書籍端末なども普及していくて作家にとつてはまさに黒船到来だつた。紙に印刷せずにディスプレイ上で読んでしまう小説も多い。出版社でもケータイ小説を専門に扱う会社があつた。そういうたところとも契約している。いくらでも原稿は出来上がる。だけどいつも思うのだ。短編は難しいと。単に二十枚から三十枚ぐらいでもその中に一つのストーリーを入れ込まないといけない。これは実に大変なことだ。多く書けば余計な部分を削らないといけないし、少なすぎれば加筆が必要である。それに最後に捻り出すような感じで落ちを付けないといけない。これもとても骨が折れることだった。だけど簡単に言えば、そういったもののハウツーは出版関係者や同じ世代の作家た

ちから学ぶことが多い。それは純文学であろうとエントメであろうと全く同じである。やり方は似ていた。肉を削り取るにしても脂身を付けるにしても方法は同じだ。その日、編集者から督促されて一気に気分が変わり、作品を一通り書き上げた。何も慌てることはない。しつかりと念を入れて推敲しさえすれば後は送るだけで何とかなる。余裕が出てきたので念入りに原稿を見直し、ディテールを直す作業をした。ここまで出来れば後は大丈夫である。出来上がった三十枚きつちりの原稿を編集者のメールアドレス宛に送つた。そしていつたんパソコンを閉じ、テレビを付けてDVDレコーダーに録っていたテレビドラマを見る。昔から読書よりもむしろテレビの方が好きで、未だにその癖が抜けない。ゆっくりとテレビドラマを見ながら窓いではいるが、原稿を送り終えてから小一時間が経つた。部屋の固定電話が鳴り出す。子機を取り、「はい」

と言ひ。担当編集者からだつた。すでに作品を読み終えたらしい。そして今回は手直しをする箇所が特に必要ないと言われた。異例だが、ほぼ生のまま文芸雑誌に掲載するようだ。安心したので、

「分かりました」

と返事した。そして子機を親機に置くと、またテレビドラマの続きを見る。疲れていた体と心に栄養を入れた。これがとても大事なのだ。こういったことで作品が出来上がっていく。作家というのは地味な職業なのである。これが現実だ。録っていたドラマが三時間ほどあつたのだが、一気に全部見終わると、いつたん席を立ちコーヒーを淹れ直した。そして飲み終わるとテレビを消し、またパソコンを開く。ちょうど午後三時過ぎだつた。この時間帯はいつもウオーキングの時間だ。歩くことで脂肪が燃焼され、好循環となる。代謝を上げるにも歩くことは欠かせなかつた。開いていたマシーンをいつたんシャットダウンし、着込んで外出する。

狭い町だ。歩いていると人間がわずかしかいない。近所に住んで

*

いる人たちとはほとんど交流がなかつた。単に顔見知りの人がいれば声を掛けるだけで後は何もない。別にそれで構わないのだった。それに変な人間も大勢いる。昼間から強い酒で酔っ払う人間もいくらかいたのだし、町自体小さいのであちこちが垣根のように見えた。別に他人から疎まれるようなことはしてない。ただ人口自体少ないので、あちらこちらにポツリポツリと人間がいるだけだ。後は何もない。僕も歩きながら嫌な人間たちと会うのだけは極力避けていた。妙な人間も多いのだ。相手しないで済むこともある。もちろんそういった人たちには一切声を掛けない。自宅のキッチンで淹れたコーヒーをブラックで一杯飲んだ後、ゆっくりと歩きながら脂肪を燃焼させた。これだけでもだいぶ変わる。別にダイエットしないといけないほど太っているわけじゃなかつたのだが、歩くのにも慣れた。長年習慣付いたことだ。今更取り止めることはない。ただ歩くだけだ。

人生は短編小説の集まりのようなものかもしれないとずつと思っていたし、今思い返せばそんな気もする。短い小説が複数連なつたものとして人生が出来ていてるような気がしていた。改めて考え直さなくても真実に程近い。人の人生経験というのはとてもわずかなものである。別にそれが少なくとも生きていけるのだし、実際そういうことをあまり考えすぎないようにしている。思い詰めると何があるのか分からぬのが、僕のような作家だからだ。それにやつといいくらか売れる物書きになりつつある。常識的に考えても、三十代だからこれから先の人生の方が断然長い。ゆっくりと歩いていくつもりでいた。焦らず地にしつかりと足を付けて。歩きながら分かつていくこともある。やはり人生の各地点にストーリーがあるものと思われた。歩き疲れたときは思い切つて太陽を見上げればいい。中空に光るオレンジ色の塊が照らし出してくれるのだから……。いつでもお天道様は空の一角にあり、見るとギラギラしている。今の僕にでもとても想像がつかないぐらい煌いていて。そしてまた僕は小説を書く。今回のように短編なども含めていろいろと……。

(Σ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7962y/>

短編小説

2011年11月23日18時49分発行